

## 通訳人を介して話をするときの留意点

JICA 長期派遣専門家

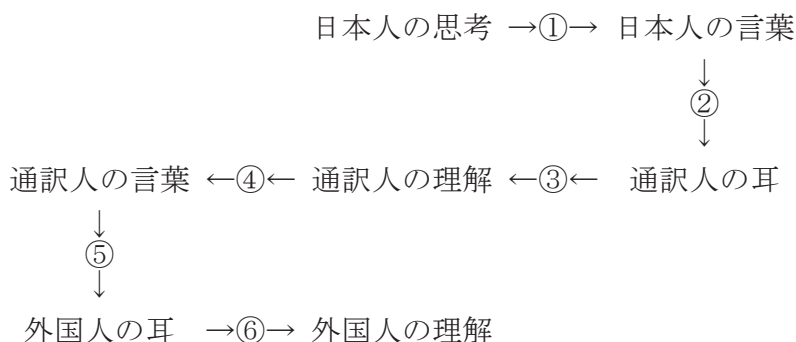
辻 保彦

### 1 はじめに

法整備支援の現場では、当然ながら通訳人を介して外国人と話をすることが多い。通訳の仕事は、言葉と言葉をつなぐことで人と人をつなぎ、国と国をつなぐ重要な仕事であって、私はそのような通訳業務に携わる通訳人に対し、敬意を抱いている。様々な国際協力の分野の中でも、法整備支援の分野は特に言葉が重要な分野であるから、自分の言葉を正確に相手方に伝える必要性はとりわけ大きく、通訳の正確性がとりわけ重要となる。ICD や JICA が本邦研修などで日ごろお世話になっている通訳人の方々は、知識も経験も豊富な方々ばかりであるが、長期専門家として任国で勤務する場合、知識も経験も様々な通訳人の方々と一緒に仕事をすることになるから、通訳の正確性を確保するため、こちら側も話し方に工夫をする必要がある。そこで本稿では、将来、法整備支援の現場に立つ若者のために、私たちカンボジアのプロジェクトの専門家が、通訳人を介して話をするに当たり日ごろから留意している点をご紹介したい。ここでは主に、日本語を習得した外国人が通訳人となる場合を想定している。

### 2 思考が伝わる過程

日本人が通訳人を介して外国人と話をする場合、日本人が頭の中で理解している内容は、以下のような過程をたどって相手方に伝わる。



まず、日本人が自分の頭の中にある思考を表現するために言葉を選択し (①)、日本人の口から発せられた言葉が通訳人の耳に届く (②)。通訳人がそれを自分なりに理解し (③)、その理解した思考を表現するために通訳人が言葉を選択する (④)。そして、通訳人の口から発せられた言葉が外国人の耳に届き (⑤)、外国人がそれを自分なりに理解する (⑥)、という過程である。

日本人が伝えようとする思考が、100%の正確性を保ったまま外国人に伝わるのが理想であるのは言うまでもない。たとえば「私は日本人です。」「私は桜の花が好きです。」「い

ま何時ですか？」などといった簡単な思考であれば、100%の正確性を保ったまま相手方に伝えることも難しくない。しかし、法整備支援の現場では、もっと高度で複雑な思考を伝える必要があるため、そう簡単にはいかない。①から⑥の過程で少しずつ正確性が減じていき、最終的に90%、80%、70%、あるいは50%未満になったり、場合によっては全く別の意味として相手方に伝わり誤解を与えてしまうこともある。では、どうすれば通訳の正確性を向上させることができるか。

### 3 通訳人へのレクチャー

セミナーやプレゼンの予定がある場合、時間の許す限り、通訳人に対して事前のレクチャーをしておく方がよい。法整備支援の現場で話す内容は、日本人でも法学部で法律を勉強した人でなければ容易には理解できないような難しい内容であり、難解な法律用語のオンパレードである。通訳人の方々はとても熱心で、ご自身で予習をして法律用語の訳語をきちんと習得した上で通訳に臨まれるが、法律用語は、その背景にある概念を理解していなければ正確に通訳できない場合が多く、特に質疑応答の場面では、概念の正確な理解が求められる。たとえば、民法の「婚姻費用」という法律用語は、実際には夫婦が共に生活していくための費用のことであるが、一般の人がこの言葉を聞くと、婚姻申請の手数料であるとか、結婚式、披露宴、新婚旅行の費用のように男女が結婚するための費用を思い浮かべることが多い。通訳人がそのように誤解したままセミナーやプレゼンに臨むと、こちらの言いたいことが通訳人にうまく理解してもらえず、そのため相手方の外国人にもうまく伝わらない結果となる。そこで、通訳人に対する事前のレクチャーが必要となるわけである。これは、上記図の「通訳人の耳→③→通訳人の理解」の精度を上げるための方策である。

私たちのプロジェクトでは、日本語のできるカンボジア人スタッフがおり、勉強会やセミナーでは彼らに通訳を担当してもらっている。彼らは全員、通訳に必要なレベルの日本語力は備えているが、法学部以外の出身のスタッフはもちろん、法学部出身のスタッフでも、民法・民事訴訟法の諸概念を完全に理解しているわけではない。そこで私たち専門家は、勉強会やセミナーの前に、通訳を担当するスタッフに対して必ず事前のレクチャーを実施するようにしている。事前のレクチャーは、通訳人のスタッフが理解するまで念入りにやるため、ときには本番の勉強会やセミナーよりも長い時間をレクチャーに費やす場合もある。事前のレクチャーによって通訳人の理解度を高めてから臨んだ勉強会やセミナーでは、通訳人との間で一体感が生まれ、ときには参加者からの不明確な質問に対し、通訳人が質問者に聞き返して確認し、質問を明確にしてから日本語に訳すという場面も見られるなど、心強い味方となってくれるし、参加者も安心して聞くことができる。

### 4 言葉の選び方

そのようにして事前の準備を済ませたら、いよいよ本番である。日本人が自分の頭の中にある思考を伝えようとする場合、まずはその思考を表現するための言葉を選ぶ必要があ

る。つまり、上記図の「日本人の思考→①→日本人の言葉」の過程である。この過程で、通訳人にとって理解しやすく通訳しやすい表現を心掛けることによって、「通訳人の耳→③→通訳人の思考」の過程における正確性の減少をできるだけ防ぐことができる。

言葉を選ぶときには、自分が英語で表現しやすいかどうか、という視点を常に持った方がよい。そのためには、まず文章を短く切ることである。特に法律用語、専門用語、数字が多く出てくる場合には、通訳人を混乱させないため文章を短く切ってあげた方がよい。この点につき、経験豊富な通訳人の中には、たとえば「あしたは雨が降るかどうか分かりませんが、雨が降らなければもちろん海へ行きますし、雨が降っても少しくらいの雨であれば海へ行きますので、まずは自分で天気を確認して、分からなければ私に電話して聞いて下さい。」といった日常会話の比較的簡単な文章の場合、文章を短く切るよりも、そのまましゃべってもらった方が通訳しやすいとおっしゃる方もいる。つまり、文章を短く切らずにしゃべってもらった方が、日本語の文章の自然な流れを損なうことなく通訳することができ、相手方も聞きやすいということである。たしかに、このような日常会話の比較的簡単な文章まで短く切ると、相手方は聞いていて少しもどかしい思いをするかもしれない。しかしながら、本稿のテーマである通訳の正確性という視点で考えた場合、短く切ってもどかしい文章になっても、少なくとも内容の正確性が損なわれることはなく、むしろ話をするとき、「この文章は短く切った方が通訳しやすいだろうか。あるいは、短く切らない方が通訳しやすいだろうか。」と迷いながら話をすることの負担の方が大きいと思われる。そこで、私個人の意見としては、法整備支援の現場で話をする場合には、常に文章を短く切るように心掛けてよいと思う。

次に、微妙なニュアンスを含む日本語特有の表現（ニュアンス表現）は、できるだけ避けるべきである。たとえば、「そういう考え方も、ありと言えあればあります。」という文章はどうだろうか。日本人同士のセミナーであれば、つい言ってしまいそうなフレーズである。これを英語で簡潔に表現するならば、「That idea is acceptable.」のようになるのかもしれないが、これは私たち日本人が上記文章に含まれる日本語のニュアンスを完全に理解しているからこそできる意識である。通訳人の中には、このような日本語特有のニュアンス表現に精通している方もいらっしゃるが、通訳人全員がそうだとは限らないので、通訳人に無用の負担をかけず、通訳の正確性を確保するため、このようなニュアンス表現はできるだけ避けた方がよい。上記文章であれば、たとえば「そのような考え方もできます。ただ、あまり一般的ではないと思います。」のような表現にすればいかがだろうか。

私たち日本人が、このようなニュアンス表現をしてしまう理由の一つとして、その場に同席している日本人を意識してしまっている点が挙げられる。つまり、当該セミナーにオブザーバーなどとして同席している日本人のことである。日本人を意識すればするほど、日本語としての分かりやすさを優先してしまい、日本人にしか分からないニュアンス表現が多くなって、通訳の正確性を減じる要因となる。そこで、セミナーやプレゼンでは、その場にいる日本人のことは意識せず、通訳人が通訳しやすいかどうかだけを考えて話すように心掛けるべきである。

## 5 通訳人に対する話し方

そのようにして自分の頭の中にある思考をどのような言葉で表現するかが決まれば、次はそれを言葉として口から発して通訳人に伝える過程である。上記図で言うと、「日本人の言葉→②→通訳人の耳」の過程である。通訳人がよく聞こえなかったり、聞き間違いをしたりすれば、通訳の正確性が損なわれることから、自分が発した言葉が正確に通訳人の耳に届き、正しく認識されるようにしなければならない。ここで重要なのは、言うまでもなく大きな声ではっきりと明瞭に話すことである。特に日本語の場合、「ます」「ますか」「ません」のように文末のわずかな違いで文章の意味が違ってくるので、文末まで明瞭に発音した方がよい。まるで演劇部の稽古のようでちょっと恥ずかしいかもしれないが、その場にいる日本人を意識しなければ恥ずかしくない。

## 6 通訳人が話すときの配慮

次に、上記図の「通訳人の言葉→⑤→外国人の耳」の過程については、通訳人が話した言葉を外国人が正確に聞き取ることができるように、たとえば通訳人に対して大きな声でしゃべってもらうようお願いしたり、通訳人のマイクの音量やエコーを調節したり、会場の最後列の人に対して通訳人の声がきちんと聞こえるかどうか確認するなど、可能な限り配慮をする必要がある。

## 7 おわりに 感謝の言葉

私が ICD 教官として勤務していた 2012 年 4 月頃、当時の山下輝年部長（2016 年 10 月現在、渋谷公証役場公証人）から、故・米原万里さんの著書「不実な美女か貞淑な醜女か」を読むように勧められた。米原さんはロシア語通訳の第一人者で、同著は通訳の仕事に関するエッセイである。さっそく通販サイトで購入したものの、そのまま本棚の肥やしとなって 2 年半が過ぎ、長期専門家としてカンボジアに赴任することになった。赴任に当たりカンボジアにも同著を持って行ったが、やはり本棚の肥やしとなり、1 年半が経過した。

私は、ICD 教官の頃から、通訳人の負担を減らすことや、通訳の正確性を確保することに関心があり、いろいろと試行錯誤をしてきた。カンボジアでは、大学を卒業したばかりで通訳経験の浅いプロジェクトスタッフに通訳をしてもらうため、通訳の正確性の確保には一層配慮するようになった。

そのようなとき、米原さんの上記著作を、何気なく本棚から手に取って読んでみた。するとそこには、通訳の正確性について自分がそれまで何となく頭に描いていたことが体系的に理路整然と書かれており、さらに、それまで自分が考えたことのない新しい視点も数多くあって、目からウロコが落ちる思いがした。本稿の冒頭の図は、同著を参考にして描いたものである。米原さんと山下元部長に、心から感謝申し上げたい。